

第五章 愛に於る悟り

第五章 愛に於る悟り

我々は今や無限なるものと有限なるものと
 の共存、最高の霊と人との霊との共存と云ふ
 永久に解けぬ問題に直面する。存在の根底に
 この上にもなす矛盾が横はつてゐる。我々は決
 して此問題を遊けて行くことは出来ない。こ
 れ我々は決してこの問題の外に立ち、何事か
 有り得べき掛け替へとなる問題と云ふの軽重を

比較衡量することは出来ぬからである。然し
 この問題は理窟の上で存在してゐるだけであ
 る。實際に於ては、この問題は全く我々に何
 事かの困難を提示しないのである。論理的
 に云へば、二点との距離は如何に近くとも無
 限なりと云ひ得る。これは無限に近づき得る
 らびである。然し我々は一歩毎に無限界を凌
 越してゐる。そして一秒毎に永遠なるものに会
 つてゐる。それは故に我々の哲人中の或る者は、
 有限なるものには存在せず、それは幻覚に造

あり。有限なるものか外観の原因となるもの
 は幻覚マヤに違ふぬ。小更在に違ふぬ。然し摩耶マヤ
 なる語は字なる名称に違ふか、何等の説明で
 は存し。それ水は眞実と共に眞実の反対物であ
 る外観が存すると云ふことと言つてのみで
 あり。然しとて眞実と外観とが全く同時
 に存する指になるか。了解出来ぬ。
 我は梵語サンスクリットでド・バ・ド・バ(25)と云はれるもの、
 即ち創造に於ける一組の反対物、例へば陽極と
 陰極、求心力と遠心力、牽引と反撥とを持つ
 てゐる。此等の力の各々名前に違ふか
 何等の説明では無い。此等は世界はその本質
 に於て幾組かの相対する力の調和せるものな
 るを断言する別途の方法に違ふない。此
 等の力は創造者の右手、左手の如く、絶対的
 調和せしめて作用し、しかも各々反対の方向
 から作用してゐるのである。
 我々の両眼と一致して働かせる調和と云ふ
 絆が両眼互に存在する。同様に物質界に於て

やアノの他音調と最低音調との互の如く、
 と寒、光と闇、運動と休息との互に相関の
 破るニ七の出来有ハ連続有存する。ニ此等
 及対物が宇宙に混乱を齎す下して調和を齎
 らす所以である。若し宇宙が混沌に迫らば
 らば、我々お互互に打勝たしと努めて居る
 ニ一の相互する本原を超越し兼ねるは
 だらう。然し宇宙は勝手に決めた暫定的軍法
 の支配下には存しない。我々互に二、三は
 此を悪徳の如く、環境との一切の調和を破つ
 て暴れ廻り、或はその乱暴を道に無限に進み
 續け行くニ七の出来有ハ如斯なる力を見出
 すやない。各々の力は、及対に曲線を描いて釣合
 ひの状態に復下収束するやない。波は外観上心
 を和らげるニ七の出来有ハ鏡平の態を以て夫々の高下
 に登つて行く。唯、或る点迄である。又
 やうにして我々は波が全て関係して居り、且
 つ大変美しい律動をなして帰つて行くか否かを
 らぬ海の偉大ななる平靜を知らぬのである。
 更際には、此等の波動及び振動、昇降は根

本的に異なる物作の統制なき、枚逸なる振
 ルに原因しておるのどほなき。此等のものは
 律動的な踊り存のどある。我の律動は主観目
 の藻掻きから生ずるものどほなき。律動の基
 礎となる振源は渾一であつて、反対であつて
 はならぬ。

渾一と云ふ振源は全く不思議なものである
 〇二元の存在は直ちに我々の頭に疑問を起す
 〇それと我々のはその解決を唯一者に求める。

終に我々が此等二つの独立せる振源の間に固
 保を見出し、それによつて根本に於ては一で
 あることを知る時、我々は復理に到達した。称
 に感じる。その時に我々は矛盾の中での最も
 驚くべき矛盾について述べるのである。即ち
 唯一者の重心多と見ゆる、その多と見ゆる外
 観は英文の反対であるが、尚且つ英文に不可
 分離的に関係しておると云ふ凡ゆる矛盾の中
 でのこの最も驚くべき矛盾について述べる。

此常に不思議なことは、自然の变化の中で
 法則一律な作用を発見する時に我々の歡喜の

全この振抵である。あの不思議と云ふ感じを失
 子人々があつた。恰も重力がリッポの落下より
 以上、不思議なものである。如くに。存在
 の一階程から他の階程への進化。万物の種
 継続より来た。一と説明するに困難なもので
 ある。いさゝか、いかに。唯、厄介な
 は恰も。水が我々の探求の究極の目的である
 かの如く、かゝる自然界の法則の處に我々が
 暫し停つてしまふ。其場合に、
 我々はこの法則は我々の精神を解放し始め、
 へし、さう云ふ。王知る。その法則は我々の
 の智力に満足せよ。のみである。それ
 水は我々の全存在に訴へ、かゝる我々の
 無限者意識を弱くするのみ。
 偉大な詩の王今析す。水は、一組の離れ
 離れ水の音なるに造る。此等の外なる音と
 い内なる媒介物なる意味を見出す。讀者は、
 の詩を貫して、毫末も破らぬ。おまへ完全な
 る。法則を發見する。その法則は思想の展開の
 法則、音楽と形との法則である。

然し法則はそれだけ制限がある。法則は何ぞも現存するものは別な風には存し得ぬと云ふことは示すのみ。人可が因果の繋がりを探求するにのみ専念してゐる時には、人の頭は諸事象の圧制から逸みれる左様に法則の圧制に屈して終ふ。或る子は王太子時に我々が單なる言葉から詩法に達すれば此等利益王し左の如き。然し若し我々が見左所氣紛れにありて隠れ理由を求めずらば、或る子は語法といふ点にのみ止り、それにて我々は何目的を達しな⁽¹³⁰⁾。此語法は文字のみ、散文法は詩にのみあり。従つては、如矢張り散文の物であり、自由としてのものがあることを知る。詩の美しきは文法並に韻文法の人釜し規則に括らるゝのみならず、その超然してゐる。文法、韻文法と云ふものは詩の翼びあり。それらは詩を自由へ運へ、一けたは選んた。これらは詩を自由へ運

んび行く。換言すれば、詩の形は法則の中に
 在る如く、詩の精神は美の中に在る。法則は自
 由に向ふ第一歩である。そして美は法則の土
 台の上に立つ完全な歌である。美は白らの
 中に制限と制限の彼岸に在るものとを、即ち
 法則と自由とを調和せしめておる。

世界と云ふ詩に於て、その律動。法則の発見
 見、この膨脹と收縮と、運動と休止との測定
 、形と特性とのその進化を探究するに人は人
 間の智力が本質に成し遂げられたものである。然

し我々はそこに止るにせよは出来まい。それ
 丁度停車場の如きものである。然しその加
 ラフトフォースは我々の家庭ではなき。全世
 界は歡楽の創造物であるにせよは知る者のみ
 加寛極の夢理に達したものである。

このことは私をして人間の心と自然との関
 係は如何に不思議なものなるかを考へしむる
 。活動の外界に於ては自然は唯一つの外觀を
 持つものの如き。然し我々の心に於ては即ち内
 界に於ては自然は全然異なりたる畫像を捉

彼方のどある。

一例に植物の花にとらう。それ水かど人か

織細に美しく見之やうと云、偉大なる奉仕を

なす所に余儀なくす。それしとる。それの色

形は全てその仕事に痛しとぬ。それ水は美

まはばぬばならぬ。然らば水は植物の生命

の連続は絶えぬであらう。大地はやがて砂

漠と化するであらう。花の色香はそれ水故に何

れ目的の左めにあるのである。蜜蜂により

ま精せしめられ、花実期必到来するや否や花

はそれの精美な花辨を振り落し、残酷な自然の

配前は強ひてその甘い香りも放棄せしめらる。

花は水亭に北し、美飾をみせながらかす余

裕がない。外から見れば、必要はその左めに

凡そその如く働いて、自然界に於ける唯一の要

因存するかの如く見ゆる。自然界に於て、蕾は

花に、花は実に、実は種に、種は又新樹にヒ

いふ風に発達する。巨動の鎖は絶ゆることな

く、鏡に二行く。擾乱又は妙善か起ると云、何

字の辨解もまけ付けまい。入くしとる。運動

の因縁は、我々自ら創造したものであると、振
據する、空想的のものではないと。

然し我々の心は我々はむしろ違つてゐる

いと笑へる。自然の領域に於ては、花は種ニの

保存と云ふ必要を仕事をなす無限の力を持つ

てゐると推薦する証明書を持つてゐる。然し

花が我々の心に入る時は、全く異つた紹介状

を持つて来るのだ。美は花の唯一の資格証明

書となる。自然界に於ては花は奴隷として

やつて来、人間の心の中にあつては自由なる

もののとしてやつて来る。然らば、さうして我

々は最初の証明書信じ、次の資格証明書

疑ふべきであらうか。花が因果関係の断絶す

るにせよなす鎖の中にてその存在を持つて来たこ

とは確に眞実である。然しそれは外延の世界

に於る眞実である。(131)

、一永久の歡楽から眞にすべこの物は生れ

のびあるとして云ふことである。

それ故、花はその唯一の職命を自然界に持つ

てゐるのみである、人間の心に於て果すべし

今一つの大事な職命を持つてゐる。そしてその
 の職命は何か。自然界に於つては、花の仕事
 は一定の時刻に出勤せねばならぬ下僕の仕事
 である。然し人間の心に於ては、花は神の使
 者の如くにやつて来る。ライマリーヤナに
 ターが⁽¹³³⁾彼女の夫から強制的に仲を割かれ、
 セイロン島の王ラーバナの⁽¹³⁴⁾黄金作りの宮殿で
 自命の不幸を思命を嘆いて居た時、彼女の最
 妻の人ラーマヤンドラ⁽¹³⁵⁾自身⁽¹³⁶⁾の指輪を持つて来
 る使者に⁽¹³⁶⁾達した。その指輪を見て、
 は使者の齎らせる使りの真なる正確信した。
 彼女は自命を忘れ、おぼろげ、百もかく自命を救
 ふことに、なつておぼろげ、最愛の人が實際、その使
 者王家にしたのだと知り、直ちに安堵した。
 かゝる使者は我々を養育する偉大な人から来
 る花の道である。俗悪なる繁栄と云ふ傲慢な
 精神が誘惑物で我々を誘惑し、我々を傲慢な
 精神の花嫁と主張する限りは、ラーバナの
 金都市に壁へら小る俗悪の虚飾と盛観とに困
 こま小て、我々は高は神の正から島流しにな

深い瞳水で満ちる。我々は自分から出る黄金の
 宮殿が我々との関係も無いこと、即ち我々の
 救ひはそれの外にあることを知る。そしてこれ水
 を覚る所に我々の愛は実を放ち、我々の生命
 は完成する。

自然界に於て蜜蜂に似たり、草に色であり、香
 りであり、花に造りぬるもの、又蜂壘への公道を不
 了印しや、人は人間の心に、一と一は中委に束
 縛され、美と歡喜とである。此等のものは
 多彩のイニキで喜み、水と露の手代を心へ齎ら

すのびある。

それ水故に、私は活動的、自然は外部で如何に北
 しく、これ、全く、目的もなしに自由に出入
 りする。私室を人々の心中に持つておるの如くと云
 ふことは、語りつゝ、あつた。そこには自然の工
 場の火は祭の灯に、まへらる。自然の作業場の
 音は音楽と、まへらる。因果の鉄鎖は外の
 自然界で、まへらる。響くが、人間の心中では、その
 純粋な、まへらる。響くが、人間の心中では、その
 に響く。手に思はれる。

自然が全く同時にこの二つの方面、しかも
 此等に反対を一つの方面と、即ち一は奴隷
 状態のもの、他は自由状態のものを持つてお
 ると云ふことは不思議な事に思はれる。同じ
 形、音、色、味に於て二一の反対の調子が耳
 之る。一は此等の小であり、他は歡花のそ
 小である。外部では自然は北しく、静止せず
 に居り、内部では自然は全く静肅であり、平
 和である。自然は一面で幸福を持ち、他面では
 困暇をもつ。此は自然を外部から見る時に始
 めてその奴隷状態を見る。然し内部では自然
 の心は限りなき美である。印文の予言者は云ふ。万
 物は歡花から生
 れ、歡花により維持される。歡花に向ひ進み行
 き、歡花の中へ入り行く。しと。
 予言者は法を無視すると言ふのでなく、又
 予言者のこの無限の歡花にいつての考察が抽
 象的考へに耽ることによつて生じた醜態から
 生れたと云ふわけでもない。予言者は頑固な
 自然の法を十分認めおろす。そして云ふ、万

神を祈ル(即ち神の法により)て火は燃ゆる。神を祈ルて風、雲、死はと。務めを

果す。と。神を祈ルて風、雲、死はと。務めを

構へておる鉄則の支配である。然し詩人は悦

由し歌を歌ふ。万物は歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

を感ずる。進歩する。歡を感ずる。然し詩人は悦

今小る。歌い手は己が歌の聴き手としてこの分
 身ともしなす。それとして外部の聴き手は子にこの
 分身の途程に違ふまい。責する人はその責人
 の中に自今の分身を求め。障りを経て孩令
 正實現するをめに、この令離を創造するのほ
 歡喜である。歡喜は二つに分れる。我々の
 不滅の無上の歡喜は(142)に令れる。我々の
 重は神に責する。そのあり、神の令身であ
 る。我々は今たれこれおる。然し、若しこの分
 離を絶対的のものとしておるなら、その時には
 絶対的不幸と純粹の悪とが此の世にあつた。こ
 とがならぬ。その場合には、我々は決して虚偽
 から眞實に到らぬ。又、決して罪
 から心の純潔に達する。これと望み得ぬから
 〇その場合には凡この反対者は永久に反対者
 のまゝである。それとして我々は決して我
 々の不和が永久に合ふ持たぬ。我々の媒介物を
 見出すまい。その場合には我々は所
 在子後、理解、心と心の融会、人生
 に能う協調も持たぬ。然し、之に

及して、我々は物の命離は流動状態に在ること
 正知る。物の個性は常に變化しつゝある。お
 互心に逢つて、お互ひの中に個性を没入しつ
 づある。終ひに科学自作の形而上学に存りつ
 づある。物質はその限界を失ひつゝある。生
 命の定義は一層不分明となりつゝある。分
 子、細胞、我々の個性の靈は至上の靈から分
 れ小れ。然しこのことは疎隔の在れなくして
 靈の究美の在れである。虚偽、苦痛、悲心
 止らざるはこの在れである。人の靈は、
 其の正無視し得るし、其の打勝ち得る。否
 なく其の在れを新しむ力と美とに成し得
 る。
 歌ひ手は己の歌を歌ふこととに變へる。己が
 歡花を形に變へる。そして聽き手は歌子の正
 最初の歡花に還えしやけらば存らぬ。それ小か
 ら歌ひ手と聽き手との互の交通は完全にある
 。無限の歡花は己の束縛を自らに適用して探
 るの形に顯現する。そして我々は形から歡花
 へ、己から我へ歸る時、有限なるものの在る

の残酷や敵対の煩ひを、我々又承けねばならぬ。眠る時迄、立ち、坐り、横はる可也。その人は不遇な好意のこの実行に致す運動せしめておかねばならぬ。

我々の欠乏は随分の無感覚と云ふことである。何故か知らぬ。我々は随分意識の完全なるものであるから故に。我々には随分故に。

命らぬものがある。この小意は我々の周囲に在る。凡そこの中の究極の意味であるから。我々は

学する感傷ではない。それは人馬の中にある。本當のもののである。それは万物の根柢にある。歡花である。それは娑婆羅門から出て来る。白

光の清い意識である。それはこの我々の裡に在る。靈に於けるのみならず、外なる空に於ける。

切實な意識である。存在(145)に於ける。我々の意識の絶頂。即ち我々に到達しなげれば、

ならぬ。若し空が歡花で、即ち我々が満ちた。

心は、誰かよく息し、動し得ん。我々の心は、羅刹、摩訶、精舎、即ちこの無限の歡花との交通

(147)

(146)

在達し得るには、我々の意識を高め、我々を
 し、これに依りて世界全体に及ぶことによ
 る。然し此等の賜物も、若しこれによつて我
 らが完全なる意義を失ふ。その意に到達するに
 は我々は自ら心の意を有るおぼやう。自
 分の心に意を有る如く人は、善人の贈り物を
 受ける。然し有用性に依りて評價する。然し
 効用は、部分的のものに於て我々とは
 用は我々の全存在を占め得ない。必要に
 依りては我々が或る欲望を保持し、於て我々
 と接觸するのみ。欲望が満ちた後、効用は
 尚も固執するならば益高くなる。此の意に
 依りて、我々の意の印しは特別の用途の
 持つ時、我々に依りて永久の價値を有るもの
 なる。これ、何人の意の印しは特別の用途の
 ためである。何人の意の印しは特別の用途の
 である。我々の全存在の左めにあるもの
 である。

食人の行はれど、そのものは、人は人を食物
 と見る。かゝるものは文明は決して棄てない
 。例故か、そのものは、文明は決して棄てない
 道に失われ、そのものは、文明は決して棄てない
 らどある。然し、恐らく、そのものは、文明は決して棄てない
 、そのものに、そのものは、文明は決して棄てない
 めに遠くへ行く必要はない。他、種類の食人が
 ある。文明の如く、食人国より、そのものは、文明は決して棄てない
 、学べる肉作と看做される。そのものは、文明は決して棄てない
 けり。そのものは、文明は決して棄てない
 ぶ、買われ、そのものは、文明は決して棄てない
 と云ふことは、唯一の価値を得る。彼は機械
 に、そのものは、文明は決して棄てない
 更に金を得るため、利用する。かくして、我々
 の慾望、復欲、安樂、憂は、人々の最低価値に引
 下がる。そのものは、文明は決して棄てない
 である。我々の慾望は、人々の中にある。そのものは、文明は決して棄てない
 ものを見せしめる。そのものは、文明は決して棄てない
 我々自身。重たい。我々自身。加へた最大
 の不善行為である。そのものは、文明は決して棄てない

る、として精神的自殺の漸進的方法であるに
 違ふない。そのは文明の作に醜い腫物を作り
 、あつらふ家、娼家、復讐心に富める刑典、残
 酷な牢獄制度や自治の訓練と自衛の手段とを
 奪ふにせよとして永久に善する程を以て到る迄
 必らず王権取りする組織の左方改やを生じしむ
 る。
 勿論、人百は人百にせよとして有用なものはあ
 る。この人は百は驚くべき機械であり、頭は驚
 くべき能率の器官であるからだ。然し、人は
 は肉作のみならず、精神でもある。そしてこの
 精神は唯、是によつてのみ真実に知り得る。
 我々が人が百を彼から期待し得る奉仕の市場價
 値によつて定義する時には、不完全にしか了
 解しなす。我々の例に於ては、残酷な優越の
 左めに我々が支払つた以上多くを彼から得る
 ことか出来る時に、人は人に一つこの限ら
 ぬ知識を以て我々が人百をさすに取扱ひ、
 として意気揚々たる自祝の感情を懐くことは
 容易と存す。然し我々が精神として人百をさすに

了時、我々は人吾共自己の同族と知る。我々
 は人吾に對する残酷は我身に對する残酷であ
 り、人吾を小くするにほ我身の人性を貪
 弱にするにほあり、專ら自命一個の利益の
 ため人のみ人吾を利用せんと試みるに際して
 我々は莫理に於て我々が損ふて得るものせ、
 唯金か安樂の形で得るのみであるを云ふこと
 を直ちに知る。

或る日、私はホリトでガシス河へ出て行
 った。秋の美しい夕日であった。太陽は沈んで

ばかりであり、空の静けさが口舌に盡し盡さ
 美と平和とで溢る。水はかりで、底大を
 水の孤かりは小波もなく、夕燈の移り変わり
 く色々の全を映しこみこむ。幾哩も、荒涼な
 る砂洲が輝き、色びらめく鱗玉有る。いっ
 か太古の時代の巨大な水陸兩棲の爬虫動物の
 如くに横ばい。鳥の群落の巢穴で穴を
 らけに存した懸崖絶壁をなせる。河岸の石を
 我々のホリトが静かに滑り行く時、大魚を
 水は表面に躍り出で、夕空の色の全

ら分能しておく内奥の障壁となるものは、我々自我實現の範囲を限り、意識の拡張を妨げ、罪を生ずる我々の欲望なのである。依故かならば、罪は一つの学なる行動ではなく、一一つの生活態度なのである。その生活態度は我々の目的は有限であり、我々の自我は充たの真理であり、我々はずべて必ずしも無論の存在のく、各々自己自身。今融せる個々の存在の左めに存してゐると云ふことは、無論のこと、假定する生活態度なのである。

そこで私は強て云ふ。即ち我々は人間に對し、意志を限定し、人間的に、この眞の見解を保持得ない。文明は、水が癸居せしめ、左力の合計によつて、なく、その法律や制度によつて、人類的な水が癸居せしめられ、又、これ等の程を形に現はして来たか、上に、つて批判されるおぼやめ。文明が答へおぼやらぬ最初にして、最後の問題は、文明は人間的機械として、より以上に、精神として認識するかどうか、又どの程迄認識するか、

の關係は、これ終らな。我々は必要の絆を
 にもつと深い、これと眞なる絆によつて世界
 に結びつけられる。我々の人生責任、實際には、こ
 の偉大な世界との關係を擔げんと、願望であ
 る。この關係は、愛の關係である。我々は世界
 の中にあふる花びら。我々は地球から星宿
 に迄及んでおる無数の糸でこの世界に結び附
 けられおる。我々は愚かしくも所謂物質界
 からの振動的令離を想像する。これによつて、
 人々の優越性を承認せんと試みる。その物質
 界を人々のは眼の眩んだ狂信故に最も恐ろしい
 敵と考へて、全然無視する程を迄に時々到る
 。然し人々の知識が進めば進むを、人々が
 この令離を打破する。これは進歩を、身の
 周りに立てた凡ての想像上の限界は、一つ一つ
 無く、なつて行く。我々は自己の絶對的優越を
 手す徴章の幾分か、失子都乞、屈辱の衝動を
 感じらる。その徴章は、よつて以て我々が我々の
 人権を正して、周囲から離れて置く権利を、我々

人等は予文者たる詩人か万物は意から生
 れ、意によつて維持され、意に向つて進み行
 ず、意の中へ入り行く。と教べゝ意味かわ
 かるのである。存在の凡々の矛盾は意の中に没入し、失は
 れる。意に於てのみ單一と二元とは不和では
 ない。意は同時に一であり、二でなければ存
 らぬ。

意のみが一よく運動と静止とである。我々
 の心は意を見出す迄の所を絶えず変へる。こ
 ろして意を見出す時、我々の心は静止する。こ
 れは、然しこの静止そのものは全くの静寂と止むこ
 とをいふ語力とか意に於る同止点で相会し運動
 の熟切な形なのである。表に於て損益は調和され、意の貸借対照
 表に於て貸方と借方とは同額となる。益金
 に進物が加へられる。創造のこの不思議な祭
 典に於て、神の自己犠牲のこの偉大な儀式に
 於て意するものは、一も、意に於て自らま
 獲得するたぬに自ら放棄する。まことに意

は放棄の行ひと交差の行ひとを一緒にし、不
 可分離的に捉ふものがある。
 意に於てその一極に個人的のものがあり、
 他の一極に非個人的のものがある。一極に於
 て、世は「余はこゝに在り」との積極的断言
 をなし、他の一極に於て、「余はこゝに在ら
 ず」との同程に強へ否定をなす。この自我
 をくして何の意をやら。而して又、この自我の
 みにては意は如何なる可能をやら。
 束縛と解放とは意に於ては相対的なるもので
 はない。何故かやう否、意は最も自由なるこ
 と同様に、最も束縛であるから也。若し神が絶
 對に自由であるならば、何事創造はなはだあ
 らう。無限者は有限の神祕を装ふて来た。そ
 して意なるものに於て有限者と無限者とが一
 に成る。
 同様に我々が自由と不自由の相對的價値に
 ついて語る時、それは學なる言葉の遊びに違
 はずくなる。我々が自由をけし望むを止め
 なくて、束縛も希望をからせぬ。凡ての制限

ち歓迎し、且つその小正超越することから意の高
 い本令なのである。意程独立なるものは他に
 一これなく、又意は此して二此程依存的なる
 のれ何處にも見えず。意に於ては、束縛は
 自由と同様榮光に満てるものである。
 毗紐派ヴィシュヌは大膽に宣言して曰く、「神は人
 に自ら正縛り附けた。そしてその中に人存
 在の偉大なる栄光は存する。」と。有限の不思議
 議を作りだすの呪文の中に、神は一人毎に自ら
 に足枷を掛け、太かくて神は己が意を最も完全
 なる美と云ふ叙情詩の形で音楽的に表白するの
 である。美は我々の心に討ち取る神の言ひ察り
 である。それ以外依の目的も持ち得ぬ。美は
 到る處に我々に語りて曰く、力の發揮は創造
 の究極の意味である。一点の色、一曲の歌
 、優に美しき形のあり所では何處に、我々
 の靈に討ち取る呼吸の掛りがある。と。飢意は我
 ら正駢つてその命令に従はしむるが、飢意は
 人々にとつて最後の言葉では無い。人々の靈
 は欠乏の圧迫や苦痛の恐迫によつては左右さ

水ないといふ云ふこととを不すべく、飢ゑの命令を
 模範に否定した人々があつた。實際人馬生匠
 王送るには、大々教の人のみならず、極く少
 数の人々、飢ゑの要求を毎日拒まねばならな
 い。然し、他方、世界には美があふ。それはい
 我々の自由を使して侮辱しなす、我々を
 てての立権を認めしむるに一指を以て使して尋
 ねるゝのひであらう。我々からして水に絶對的に無視
 し得て、彼の罪を結果として受けなす。美は
 我々に對する呼び掛けであるが、命令ではな
 い。美は我々の中に愛を求め、そして愛は強
 制によつては決して得られなす。強制は、ま
 ことに人馬にとつて究極の魅力ではなす、
 歡花が究極の魅力である。而して歡花は到る
 處に在る。歡花は大地を蔽ふ緑をす草の中に
 一靜謐なる碧空に、充溢指くに由なき春に、
 禁欲嚴たる灰色の冬に、我々の肉作の骨組に
 生氣を与へる生ける肉の中に、高く尊へ人馬
 の姿作の完全な釣合ひの中に、生匠の中に、
 我々の力の全行使の中に、知識の獲得の中に

一、悪との戦ひの中に、決して我々が令け前
 かり得ぬ利得を得んとて我々との中に在る
 。歡は到る處に在る。それには有り余る程あ
 った。不中要である。否、それこそ、塵
 中要の最も断乎たる命令に背くのである。歡
 は、法の束縛は妻によつてのみ説明は得
 ると云ふことは示すために存する。法の束縛
 は、作と心の如きものである。歡は一の眞
 理、即ち我々の靈と宇宙、宇宙靈と至高の愛
 人と一なることの實現である。